

学生優秀発表賞受賞者：久保田ともよ 演題番号 108

遺伝子分析科学認定士試験への挑戦 — 8年連続挑戦の歴史と意義 —

久保田 ともよ*§ 生江 麻代* 望月 泰男* 谷口 智也
檜山 由香里* 香取 尚美* 山藤 賢*

I. 研究概要

日本臨床検査同学院による遺伝子分析科学認定士試験は、本年度で8回目の実施となった。昭和医療技術専門学校では、第1回目の実施以来、3年生の有志が本認定資格(初級)取得に挑戦し続けてきた。本年度も、3年生における約3割の学生である24名が受験に挑戦した。このような歴史がある中で、我々学生が卒前に認定資格取得に挑戦することの意義はどのようなものであるかを検討した。

アンケートを基に検討した結果、本校の学生達は、認定資格取得を目的にするというよりも、資格取得を手段とした自己実現の達成に対して価値を感じていることが示唆された。本校3学年生は例年、半年間に渡る臨地実習との両立など困難も多くある中でも、学生のうちに本認定士資格の取得に挑戦する学生が少なくない。そういった学生の多くは「自分の勉強やスキルアップに繋がる」などという理由から受験に挑戦していた。さらに重要な点は、たとえ資格取得に至らなかったとしても、認定資格の取得という目標を持ち学習に励むという過程が、自らにとって付加価値になると考えている学生が多かったことである。この傾向は、今年度だけでなくこれまで挑戦してきた先輩

方からも見受けられた。そういった先輩方を間近にしていたことも、自ら目標を持つ内発的動機とそこから生ずる目標達成のための過程に価値を見出すことができるようになった一因であろう。

本認定資格を所持することが遺伝子関連検査の従事に直結するような性質のものでないことは我々学生も十分に認識している。また、現場での経験もないままに学生が認定資格を取得することに疑念を抱く方々もおられるかもしれない。しかし我々学生にとって、本認定資格取得を目指すことは、遺伝子検査というものへの知識、理解を深めるだけでなく、自らの学習到達度や、学習に対する学外からの客観的評価を得られる大変貴重な機会である。また、学生自身による内発的動機に基づく挑戦と経験は、卒後にも我々にとって大きな糧となると考える。

II. 受賞の感想と将来への抱負

本大会には主管校の学生としても参加させて頂き、実に多くの先生方や諸先輩方のご講演を拝聴する機会に恵まれた。そこで、臨床検査を学ぶ一学生として、我々学生は教育の機会を与えてもらうばかりでなく、さらに積極的に学ぼうとしなければならないということを痛感した。本大会では、実に多くの先生方、先輩方が、より良い臨床検査

*昭和医療技術専門学校 §igi-rinken@showa.ac.jp

学教育のために議論を重ねるお姿を多く拝見した。より良い臨床検査教育とはつまり、我々学生自身が必要ならぬかを我々自身で考えることでもある。自らの学習姿勢を顧みる貴重な機会を頂いた。また、臨床検査に関するだけでなく、貴重なご講演を拝聴する機会も頂くことができた。中でも、西成活裕先生のご講演での「勝つたらず」というお話は、功利主義における「最大多数の最大幸福」とは似て非なるものであり、私にとっては非常に新鮮で、大きな感銘を受けた。

このように多くの素晴らしい機会を頂いた本大会において優秀発表賞を拝受し、大変嬉しく思う。来春からは臨床検査技師として多くの諸先輩方と

ともに働かせて頂くこととなるであろうが、本大会において痛感した、自主的に学び続ける姿勢の大切さを忘れず、臨床検査の発展に尽力できる人材になるべく精進していきたいと思う。

末筆ではあるが、本学会発表時に座長を務めてくださった千葉科学大学の藤谷 登先生、本研究の機会を与えてくださった本校学校長の山藤 賢先生はじめ教務課、職員の先生方、本校でご指導を頂いている全ての外部講師の先生方、アンケートにご協力いただいた本校学生の皆様方、本研究にあたり数々の助言をくれた、私が最も尊敬する研究者である父、そして本大会に関わる全ての皆様方に厚く御礼を申し上げたい。